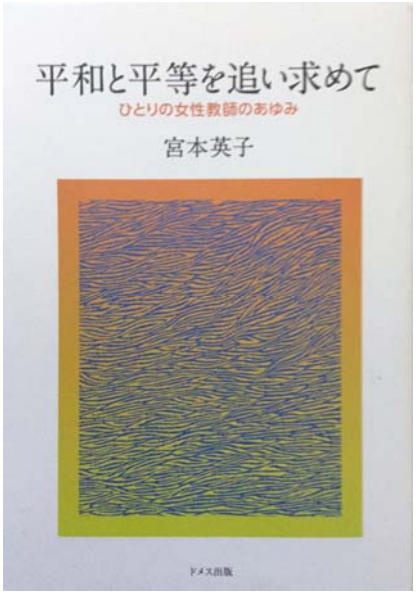
『平和と平等を追い求めて』を読む

副題は「ひとりの女性教師のあゆみ」で、ドメス出版から 2015 年 2 月に出版された。著者が「自分史」を書こうと思い立ったのは、「子どもに寄り添う教育ができた幸せを書き残したかった」からだという。



3 年かけ書かれた本書は、著者の「自分史」だけではなく戦中から戦後の歴史、とりわけ戦後の民主教育と女性教師のあゆみであり、日本の現在を考えるうえで示唆に富む。内容豊富で短くまとめにくいが、3 点ほど本の紹介と「感想」めいたことを書いておきたい。

まずは戦後教育史、女性教師のあゆみについて。新任教師として金沢市の中心部にある中学校に赴任して、「日本の教育を担う責任と誇りを自覚」する。それから 36 年の教員生活のなかで、中学・小学校の主体的な教育実践、図工科・家庭科や学校給食などの取り組みは特筆されるものがある。

次に、こうした教育実践と並行して進めた、労働組合の活動記録である。堺と大阪の教職員組合婦人部長の大役を長年にわたり努めるなど、「平和と平等を両輪に」全力で駆け抜けた 17 年である。育児休業などの労働条件改善にとどまらず、男女平等教育と平和教育にも力を入れる。1992 年に退職してから「第二の人生のスタート」を切るが、ここから国際婦人年大阪の会をはじめとして、「女性が生き生きと活躍できる社会」をめざして、活動をさらに国内外に拡大していく。

さいごに、生い立ちから家族について。物語は富山で立山連峰を仰ぎみながらの生活から始まる。戦中から戦後の厳しい生活、「わが青春の金沢大学」、就職そして結婚へと続く。じつは著者の宮本英子さんは、わが恩師である宮本憲一先生の奥さまである。私にとって、この本のように「英子先生」である。信州松本から大阪に出てきて、苦しい生活のもとで、宮本先生はもとより、英子先生、おばあちゃんに本当にお世話になった。本書掲載の写真を見て、堺のご自宅でご馳走になったことなどを思い起こした。ご家族が書かれたコラムも、それぞれ個性的で心にせまる。

平和と平等を追い求める女性教師のあゆみから、学ぶことは多い。一読を勧めたい。

（2015 年 4 月 1 日）